

邦人南方進出物語

クタイ國の卷々 柴田賢一

(一)

タイにおいて日本人の發展は山田長政の物語と共に餘り有名だ。當時タイの首府はアユチャヤで、メナム河にのみ、水の都として知られており、日本人は城姫の左岸に廓を與へられて居住してゐた。

何時からかに住むやうになつたのか、明確な記録がないので知る由もないが、十六世紀の末、即ち天正の末ごろから水祿、應長へかけて、續々と渡來し寛永の八、九年ごろには其數が非常に多くなつた。「暹羅風土記」には「元和年中より寛永の末に至るまで大陥落の諸浪人、或は賈ケ原、または天草落人と謂ふ者も、より多く暹羅に逗留す。もし海賊強あらうが、新村出博士も續南蠻廣記の中で

「慶長以前暹羅における根本の相當深いのから推す」とある。彼等は一部商人として貿易に從ひ、一部その武勇を高く買はれて王室に仕へてゐた。日本からタイへの輸出品は、傘、蚊帳、扇子、屏風、牛皮、ナムラック、黒砂糖、水牛角、ガムラックチーク、犀角等であつた。

記録に残つてゐるタイ國在住の主要な日本人は、山田長政を筆頭に、木谷彌左左衛門

津田又左衛門、金屋源三郎、山田仁太夫、山田仁兵衛、有山田仁太夫、速水又三郎、智原五郎八、谷久兵衛、今村左京、岩角平右衛門、鈎屋庄左衛門玉屋忠兵衛等である。

▲山田長政と當時の國內事情

ふほどに高名なので、名前を書くのですら気がひけるくらいであるが、どうしても彼の略歴を外するわけにはゆかない。

彼は駿河の人、駿府の商人浦

佐右衛門、太次郎右衛門の

書くのですら気がひけるくらいであるが、どうしても彼の本を訪ねたときに徳川幕府の

合、掛り合ひとなつては困るといふのでつた。爲政者としても怠けではないのは、元和九年然しこれはまばらぬ。

千萬といはねばならぬ。

事勿れ主義もいゝが、卑怯

命令でこの箇所は削除した。

彼の意志としては日本がタイ

記されてゐたので、將軍秀忠は、その原文に「日本人が重用されてゐるのは、大變幸福なことである」といふ意味のことを記してゐたが、秀忠の返翰を起草した金地院崇傳

ことであるが、萬が一にも將軍で仕官してゐるのは結構なことであるが、萬が一にも將

來不都合な事情を惹起した場合、掛け合ひとなつては困るといふのでつた。爲政者としても怠けではないのは、元和九年

然しこれはまばらぬ。

千萬といはねばならぬ。

事勿れ主義もいゝが、卑怯

命令でこの箇所は削除した。

彼の意志としては日本がタイ

記されてゐたので、將軍秀忠

ことであるが、萬が一にも將

來不都合な事情を惹起した場合、掛け合ひとなつては困るといふのでつた。爲政者としても怠けではないのは、元和九年

然しこれはまばらぬ。

千萬といはねばならぬ